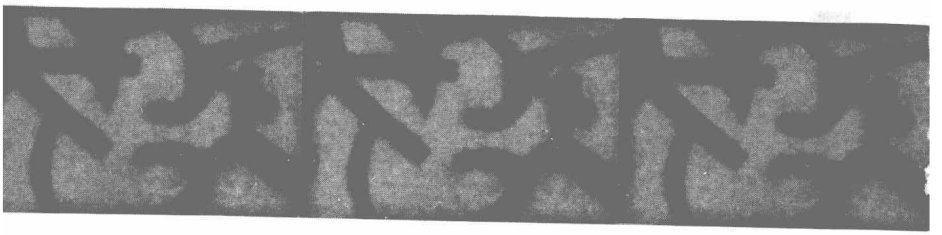
15
37

針(しんみょう)女



有吉佐和子

新潮社版

針女（しんじょ）

昭和四十六年三月二十五日発行
昭和四十六年十月三十日四刷

著者　有吉佐和子（ありよしさわこ）

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話　東京〇三(260)一一一一(代)
振替　東京八〇八

印刷所　株式会社金羊社

製本所　新宿加藤製本所

定価　五五〇円

© Sawako Ariyoshi, Printed in Japan 1971

落丁、乱丁本はお取換え致します。

針（しんみょう）女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

胡座をかいた左足の親指の先に布端を挟んで、清子は慣れた手つきですいすいと針を進めていた。が、縫いにくい絹であった。このところ縫い直しの注文ばかりが多くて、滅多に新しい反物に鋏を入れるようなことがなくなっている。が、その中でもこの縮緬は縫いにくい。しぼの高い縮緬で染めの色は深く、菊の小紋柄はなかなか上品なのだが、どう見ても絹の命は終っていて、手ざわりがよくなかった。「絹は生きもんだ」というのが三五郎の口癖なのだが、その伝でいけばこの縮緬は死んでいる。絹針は四ノ三半と呼ばれるものである。カネ尺一寸三分五厘（約四・二センチ）の寸法だ。針先がどうしてもミシミシと小さい軋み音をたてる。清子はときどきそれに苛立って、針をひくとついでに頭をかがめて針の先で自分の髪を掻いた。

もう二年も前から髪油などはつけたことがなくて手入れの悪い髪なのだけれども、やはり若さは有りがたいもので髪には自然の油がしみている。髪を掻いたあとの針はしばらくすいすいと古い絹の中を走った。「縫ってるときに布の糸を切っちゃあいけない。針先が音をたてるのは布の糸を切るか傷をつけるかしている証拠だ。本当の名人が縫うときは、縫糸は絹ン中に埋まるんだ。糸が織りこまれなくっちゃいけないんだよ」と言いながら仕こんでくれた三五郎の声が聞えてくるようだ。針仕事では名人と言われて自分でも上手の自信を持っている三五郎は、その職人気質には面白くない時代を迎えてすっかり旋毛を曲げてしまい、近頃は酒が手に入れば朝から冷やで

飲んで茶の間の片隅で酔っぱらっている。だから仕事がくれば三五郎の女房のお幸か、三五郎が娘同様に可愛がっている清子の二人が針をとらなければならない。ほんの一年前まではお針の稽古に来るお嬢さんも含めて、縫子の数には困らなかった仕立屋だが、勤労動員で表通りのお邸の女中たちまで工場へ徴用されてしまっている時代だから、前は縫子たちが肘をすりあわせて二列に並んでいた広い二階の仕事部屋も今では清子ただ一人が、ぽつんと坐っているだけだ。

もっとも縫子の数が減っただけ注文も減っていて、非常時で世の中の風俗はどんどん変っている。長い袂を着た女たちは、街角で「袂を切りましょう」と書いたビラを渡されたという話など、こういう仕立屋には逸早く聞えていて、そのときは三五郎が威勢よくいきまいたものだった。「何を、長い袂を切れだ？　罰当りめ。長い袂は仕立て直すたびに傷んだところを縫い詰められて経済なんだ。最初から短い袖に仕立ててみろ、仕立て直すときは筒袖になっちまわあ。長い袂が邪魔だてえなら襷ってえ便利なものがあるじゃあないか。切れといって、切った布端をどうしろってんだよ。ヘッ、座布団にだってなりゃあしねえぞ。よっぽど不経済てえ奴じゃないか、なあ、おい」

弘一はそのころもう三高の学生だったが、休みで帰っては父親の愚痴にあうたびにそれが癖の唇の端をちょっと曲げて笑った。

「経済観念で袂を切れと言ってるんじゃないんだよ、お父さん。まあ精神主義なんだね。お父さんのとは論点が違うんだ」

「何が違う。精神なら襷がけの方がずっと勇ましいぞ。その襷に書きゃあいいんだ、頑張りましょう勝つまでは、って具合式にさ。当節は鉢巻にまで字を書くのが流行るじゃないか。襷にも書けばいいんだ。着物に鋏を入れるこたあない」

「お父さんの気持も分らないじゃないけどね、学校も学問より教練の方が大事な時代だよ。何しろ戦争なんだからね」
「戦争だったってべら棒め、戦争は兵隊がやるものじゃあないか、女子供が国の中で袂を切ったからって何が間に合う」
「そうか、お父さんは袂のことで激昂しているんだね。日頃はかなりの精神主義者だと思っていたけれど、お父さんは仕立て職人以外の他の何者でもないんだね」
「何を生意気言ってやがる。学校がなんだ、成績がなんだ、親と話すのに薄ら嗤いをしやがって、なにか、それが当節の教育か」
「別に教育されて笑ってるわけじゃないよ。お父さんと話してると、落語か浪花節の登場人物に会ったような気がして可笑しくなってくるんだよ。その稚気は愛すべきだと思うけどね」
「こらッ」
三五郎が本気で怒り出すと弘一は声をたてて笑いながら階段を駈け上って、二階の奥に増築された彼の勉強部屋へ飛びこんでしまう。それを見ると若い娘たちは階下のやりとりを聞いたように明るく笑い出したものであった。口だけ聞いていれば小生意気な少年だったが、弘一は三五郎夫婦の一粒種で大事に育てられているから、のびのびとして明るく、三五郎に弟子入りした縫子たちはみんな弘一には好意を持っていた。彼が中学から三高へ進学した頃には弘一の顔を見るのが楽しくて稽古に通うお嬢さん方も殖え、清子はそういう中でみんなと同じように弘一への好意を娘らしい思慕に育てていた。
「お父さんは口ではああ言っているけれど、弘一が学問してるのが芯じゃ嬉しくってしようがないんだよ。弘一が小学校で級長になったときのお父さんは今でも思い出すと吹き出してしまうよ。

そのときはお酒も飲まないのに酔っぱらってねえ、近所中に吹聴してまわったんだから。その頃から弘一は学士さまにするんだって大張切りだったんだよ。学士さまにしたら仕立屋の方はどうするんですって言ったら、べら棒めってあの調子で、大学出て針を持つこたあないよって、学問するには金がいるんだから、親はせっせと貯金しとかなきゃいけないって、若い頃は大酒飲みだったのが、正月以外は禁酒してたんだよ、ずっと。この頃また飲み出したのは、あんまり弘一が育ってしまったんで、あれはすねてるんだろうねえ」

母親の方のお幸は、人の好い顔で、これは夫にも子供にもすっかり満足していて幸せそうだった。お幸は世話好きで、いつもこまめに躰を動かしてなければいられない性分だから、用事がなくなるとふかし藷と茶を淹れて二階で縫物をしている清子のところへ上ってくる。

「清ちゃん、あんまり根をつめちゃいけないわ。ちょっと息抜きをしたら」

自分も仕立屋と結婚して三五郎にこづかれながら針を持っていたから、まあ縫物では女一通り以上のことはできるのだが、お幸の性格には坐ったきり黙々と針を動かしているのは、辛気くさくってかなわない。

「それ瀬田さんのでしょう？　どこまで出来たの？」

「上衣が終るところなんです。まだもんぺの方は裁断してないんです」

「まあねえ、縮緬でもんぺをこさえるなんてことは、私らには考えも及ばないことだけど、流石に御大家の奥さんは違うわねえ」

隣組の防空訓練で勢揃いすると銘仙や木綿の紺絣で作ったもんぺがずらりと並んだ中で、表通りの数軒の家々の人々と、裏通りの二十軒ばかりの家から出た連中とは一目見て身装も様子も違っていた。

東京市に隣組という組織ができたのは太平洋戦争の始まる二年ほど前である。回覧板という隣組回報が毎月二回ずつ発行されるようになった。それまで隣近所というものは漠然と向う三軒両隣と限られていて、表通りの大邸宅は大邸宅同士でそれなりの近所づきあいがあり、裏通りには長屋なら長屋なりの緊密な連絡があったものだが、隣組は町内のブロックごとに構成されたから、お幸が御大家と呼ぶ瀬田家のような表通りの家々も、裏のいかにも下町らしい一画も同じ一つの隣組として編成されていた。瀬田家がそれまで交際していた向う三軒とは隣組が別になった代り、それまで全くつきあいのなかった職人たちの家庭といやでも顔を合わせる機会が殖えてきたのだ。近頃は日本全国の隣組が、銃後の守りを固くするためにラジオ放送の番組まで与えられて、一斉に月に最低一度の常会を持つようになってきていた。それは内務省の指導のもとに行われているのだが、庶民の実生活の中では、お幸の言う御大家が平等に職人たちと防火訓練や配給制度を受け、顔が合い口がきけるという変化をもたらしたという形で受け入れられていた。

下谷の上根岸は、芝居では遊女屋の寮などのあった粋なところだが、江戸時代は加賀の殿様の下屋敷だった。その跡が、今では何十軒という家が立って八二番地という変哲もない住所でまとめられていた。稲荷大明神を祀っている八二神社という小祠があり、多分そこでは八二番地に住む人々の平和と安全が祈願されていたのであろうが、今ではその小さな社屋にもべたべたと「必勝」「武運長久」「打倒米英」などと大書された紙が貼られるようになった。その神社がある通りを八二番地の人々は一応表通りと呼んでいて、清子たちの隣組では、会社重役の瀬田家と、日本舞踊の師匠と、内科小児科の医者と、浅草の方に大きな料亭を経営している人の隠居所と、地方の大地主の東京の邸、この五軒が表通りに面している家々である。両端が医院と踊りの稽古所になっていて、その角から小路へ曲ると、とたんに家々の構えも小さくなり、それぞれの稼業もハ

ンドバッグの家内工業やら、やはり家の中で注射用のアンプルを製造していたり、畳屋、左官屋などの職人たちがいかにも江戸の下町らしく小さな家にきっちり住んでいるといった塩梅である。大滝三五郎という侠客のような名を持った仕立職の家は、そういうごみごみした一画にあって、二階があってそこが広いから、常会には屢々場所を貸すことになった。隣組長は、最初は医者が選ばれていたが、隣組の仕事が最初の回覧板から殖える一方で、魚や煙草の配給まで組長の責任になってくると本業の医院の方と忙しさが板挟みになるので辞退したいと言い出した。至極もっともなことだと一同納得して、それでお役が一時は三五郎にまわったことがあり、その間は世話好きのお幸が面目を発揮して八面六臂の働きをしたのだが、肝心の三五郎が途中でいやけをさしてしまい、

「べら棒め、この齢で兵隊の真似ができるか。俺にゃあゲートルは似合わねえんだ」

と啖呵を切って仕事を投げ出してしまった。三五郎がゲートルの代りに自分で仕立てた得意の脚絆をはいて下谷区の組長集会に出かけたところが軍国時代に相応しくないものとして非難されたのがきっかけだった。

その前後から三五郎には面白くないことが頻々として起っていた。たとえば今、清子が縫っているもんぺについても、最初それが銃後の女性の衣服として流行し始めたとき、三五郎は気を入れた仕事にかかる前の癖で両手を勢いよく叩きあわせ、

「もんぺがどこの言葉か知らないが、ありゃお前たっつけ袴のことだあな。軽衫だよ。股引じゃあねえ、股引てなパッチだ、職人の着るものだ。軽衫てのはお金持の御隠居なんぞが庭木の手入れなんかをなさるときにはくという結構なものだ。仕立屋と一口で言ったって、誰でも仕立てられるものじゃねえぜ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と効能書のようなことを言って、早速に隣組の女たちの注文を受けて裁ちあわせ、縫い上げた。その頃ようやく新聞にもんぺの製図や裁断について詳しい説明記事が出るようになっていたが、三五郎の自慢しただけあって軽衫は和服を着なれた女たちには好評で迎えられていた。

注文が殺到した時期は、清子も三五郎の指図を受けて軽衫の縫い方を習い覚えたが、清子は自分がそれを一着に及んだとき、軽衫では年配の女たちならともかく若い娘たちには不都合なところが多いのに気がついた。もともとが軽衫は三五郎も言った通り、和服の上からはくもので、従って股上が低い。明治生れの女たちは、盛夏のアッパッパ以外には着物を着なれて足もすっかり内股で、大道を闊歩する習慣を持たないから、それで困ることもないだろうが、清子のように小学校時代は体操で男の子と同じ運動をしてきて、着るものもずっと洋服で育ってきた娘には、股上の低い軽衫は膝頭に枷をはめたようで足が不自由だったし、腰のまわりに無駄な布が多くて姿がいかにも不格好だ。洋服で育ってきた若い娘たちは、もんぺをはくときはスカートはとってあるから、軽衫のように和服の裾をたくしこむ必要がない。

清子は小学校で洋裁のごく初歩的なところを習ってあったから、パンツやズロースの型紙の作り方を思い出し、それをもんぺにまで発展させて自分なりに裁ち方を工夫してみた。木綿の久留米絣の着物一枚をつぶして、まず大きめの寸法で裁断し、それから洋裁風に仮縫いというものをしてみて、はいては股上の具合を補正し、やがて本縫いをして仕上げてから、それを常着にしてしまった。軽衫のもんぺより遙かに身軽く活動的である。

配給のスケソー鱈を計量器にかけて戸別に分ける仕事をその姿で手伝っていたところが、籠をさげて配給をとりに来た中で、

「清子さん、そのもんぺ誰が縫ったの？」

早速目をつけて声をかけたのは瀬田世津子だった。
「あら世津子さん、お久しぶり。工場に行ってたんじゃなかったの？」
「嘘よ、工場には行ってないわ。女学校が工場になっちゃったのよ」
矢津清子と瀬田世津子の二人は根岸小学校では同級生だった。成績に甲乙はなかったが、上級学校に進学する世津子と、小学校だけで仕立屋働きをすることになっている清子とでは先生の方の扱いも違っていて、世津子はずっと級長を続けていた。いつも華やかなワンピースを着替えて登校する世津子と、孤児の清子とでは、いくら世話好きのお幸が面倒を見てくれていても、まるきり雰囲気が違ってくるのも当然で、家も表通りと裏通り、同じ町内でも暮しむきが違っていたから、同級生でも連れ立って遊んだことは一度もない。今も久しぶりで顔があって話し始めた二人でも、その髪形から着ているもの一切が対照的だった。
清子は長い髪を二つに分けてそれぞれ三つ編みにして頭をぐるりと巻いている。初秋であったから白い半袖のブラウスに紺絣の形のいいもんぺで、素足に赤い鼻緒の下駄をはいていた。世津子は女学校を卒業するのも待てないように髪を切ってパーマネントをかけ、唇には紅をぬって派手な化粧だった。ブラウスは水玉模様で赤いカーディガンを袖を通さずに羽織っていた。そこではいているもんぺが思いきって格好が悪い。足にはサンダルを突っかけている。
「ねえ、そのもんぺ、あなたンとこの小父さんの作品？　じゃないわねえ」
訊かれて清子は小声で答えた。
「私が作ってみたの。ズボンみたいに見えないかしらって心配してるんだけど」
「ううん、とてもいい格好よ。ねえ、私のも縫ってくれない。これは、ほら、小父さんの縫ったもんぺ、ママが縫ってもらったんだけど、ほら、こうだもの」

世津子は片脚を横へ伸ばしてみて、股下のひきつれるのを清子に見せ、もっとも今は外へ出るので大急ぎでワンピースの上に母親のを借りてはいてきたのだと言った。

「ねえ清子さん、あとで取りに来てよ。いいでしょう？　うちは女中がいなくなってからママも私も大変なのよ。あなた手があいたとき手伝いに来てくれない？　ともかく着物出しとくから取りに来て、ねッ」

世津子はスケソー鱈を受け取ると、言うだけのことを言って、清子の返事も聞かずに身を翻すようにして行ってしまった。

「清ちゃんは瀬田さんのお嬢さんと学校が一緒だったって？」

隣組の中では金棒引きだと悪口を言われている植木屋の女房が口を出した。

「ええ」

「なんだか英米的だねえ」

軍国ナショナリズムが庶民の生活の中に浸透してきて、それまではハイカラとかモダンといえば褒め言葉だったのが近頃は英米的という言葉がとってかわって悪口になっていた。清子は反射的に首を横に振って、

「いいえ、そんなことはありませんよ。瀬田さんは英米的じゃありません」

むきになってかばっていた。

魚の配給が終ったあと、清子は石鹸を節約して水道の蛇口の下で何度も何度も指をこすって魚臭を流しながら、清子はしかし世津子に先刻言われたように世津子の家に行くべきかどうかとしばらく迷っていた。世津子とは小学校で同級生だったというこだわりがあった。清子の職業は三五郎と同じ仕立屋なのだから、注文があれば反物を受け取りに出かけるのは当然かもしれない。

だが近頃は非常時で隣組が始終顔を合わせることが多いので、それに八百屋でも菓子屋でも昔風に客に応対する気風もなくなってきた時節で、三五郎のところへくる注文も、昔からの馴染みの呉服屋以外は、近所ではみな注文主の方から着物を持ってきて、縫い直しなどを頼みに来ている。それに清子には、女中がいなくなって瀬田家では夫人も世津子も大変だから手伝いに来いと言われたのもひっかかっていた。いくら御大家と仕立屋という身分の開きがあるにしても、同級生が友だちに女中代りに手伝いに来いと言うのはひどい話ではないか。

とつおいつ思案した揚句に、しかし結局清子は世津子の家に出かけることにした。何も仕立屋だからといって世津子の何気ない言葉の端をとらえてひがむことはないと反省したからであった。世津子が悪気があってああしたことを言ったとは考えられなかったので、清子が来るものと思いこんで世津子が待っているとしたら、それは悪いと清子は思ってしまう。

瀬田家の大きな門は閉っていたので、清子は勝手口の木戸をあけて躰をこごませてくぐりぬけた。別棟の洋館の方からピアノが聞えてくる。

「ご免下さい」

内玄関で二度呼んだが返事がないので、お勝手の戸を開けて大声を出した。

「はアい」

返事とピアノが止むのが同時で、やがてスリッパを鳴らしながら世津子が姿を見せた。もんぺを脱いで、華やかなワンピース姿だった。

「あら清子さん、上って頂だいよ、今大変なの」

清子が上るのを待ちかねるようにして世津子は背中を向けて家の中へ歩き出した。当然清子が従いてくるものと思っている。

大変というのは何のことだろう、と清子は思いながら、広い家の中の長い廊下を、世津子について歩いていた。さっきのピアノは世津子が弾いていたのに違いない。暢気にピアノを弾いていて何が大変だというのだろう。広い家であった。つい二年ばかり前までは女中が三人か四人いた筈の家である。それが今は主人と夫人と世津子と、世津子の幼い弟妹ばかりの家で拭き掃除などしたことのない人々ばかりが住むところとなったせいか、埃っぽくて薄汚ない家であった。廊下を歩きながら、ひょいと見るとどの部屋も、おそろしく乱雑である。

「二階でママが大変なのよ」

階段の下にきて、世津子が振り返って笑いながらまた同じことを言い、トントンと上りだした。階段はちょっと暗いので、隅の白い埃が一層はっきり浮いて見える。ここらは一カ月も拭いたことなどないのではないかと思えた。掃除に手間のかかるこんな大きな家で暮していては、誰彼の見境もなく手伝いに来てほしくなるのは当然だろうと、清子はようやく魚の配給をとりにきたときの世津子の言葉に納得がいった。

二階には二十畳もありそうな広い座敷があって、襖も障子も開け放たれたところは本当に「大変」という表現がふさわしい有様になっていた。この季節は三五郎の家でも一日は虫干しという行事を行なって冬と夏の衣服の入れ替えをやるのだけれども、瀬田家の二階は三五郎の妻のお幸の一年分の衣類などとは較べようもないほど大量な繊維製品の山になっていた。鴨居から鴨居へわたした紐に、色とりどりの着物、羽織、長襦袢がだらしなくひっかけてある。虫除けの樟脳の匂いが部屋一杯に立ちこめていた。

瀬田夫人は、そういう中に坐りこんで、ものうげな手つきで一枚ずつの着物を吟味したり眺めて考えたりしていた。

「ママ、清子さんよ。少し手伝ってもらったら？」
世津子がそう言うと、瀬田夫人は色白な品のいい顔を清子に向けて、にっこり笑った。
「いらっしゃい。御苦労さまね」
清子はもんぺにする布を受け取りに来たつもりだったのに、瀬田夫人と世津子は清子が虫干しの手伝いに来たものと頭からきめてかかっている。
「大変なのよ、清子さん。疎開の荷物をまとめる段になって、ママはすっかり迷ってしまっているの。田舎へ送るのと、東京へ置いておくのと、どれをどうしようって迷ってるのよ。私はもう相手がしきれなくってピアノ弾いていたのよ。女って着物に対する執着が強いのね、驚いちゃった」
世津子は笑っているが、瀬田夫人は深刻な顔つきになって、
「だって迷うわよ、ねえ、清子さん。これから使うものを疎開したらいいのか、いらないものを疎開したらいいのか、これが分らないのですもの。人間は東京に残って、ひとまず荷物だけ疎開とパパは仰言るけど、何もかも田舎に送ってしまったら、今度田舎から東京へ戻すときの手間が大変だし、清子さんのところはどうなさるの」
愚痴ともつかず喋ってから、おっとりとした調子で質問してきた。
「私のところは田舎ってありませんし、疎開は考えていないんですよ」
三五郎は親代々の江戸っ子で、清子は親類もない孤独な境涯だから、疎開疎開と世間が騒ぎだしてからもそれは自分たちには関係のないことだと思っている。第一、仮に疎開するべき田舎があったとしても、この瀬田家の衣類の山を眺めたあとは、お幸が命の次に大事にしている大島紬の着物一枚など、わざわざ疎開するほどのものではないと思ってしまう。だから清子の返事は素

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com